

- 揖斐川町では、鳥獣による農作物等の被害増加を背景に、地域住民から被害対策や鳥獣の捕獲に対する要望が増加。
- 町内の民間企業の社員が狩猟免許取得し、平成25年度から獣害対策事業（侵入防止柵の設置や捕獲）を本格化。
- 岐阜大学による捕獲技術の分析結果を基に猟友会員以外の地域の捕獲者を育成。食肉処理施設への搬入頭数が増加。

揖斐川町の課題

- 町面積の9割が森林地帯となっており、多くの野生鳥獣が生息。
町内の野生鳥獣による農作物被害額はシカ、イノシシを中心に急増。
平成20年度 110万円
→平成27年度 214万円
- 野生鳥獣による農作物被害の増加に伴い、侵入防止柵の設置を進める中で、地域住民から「獣害を何とかして欲しい」「ニホンジカ、イノシシを捕まえて欲しい」との要望が増加。
- 地元猟友会ではイノシシを中心に捕獲をしており、シカを捕獲する者の確保が急務だった。

猟友会以外の捕獲人材の確保

地域住民の要望を背景に、町内で侵入防止柵の設置を行っていた建設業者の所産業(株)では、社員が狩猟免許を取得。

平成25年度から獣害対策事業（侵入防止柵の設置と捕獲）を本格化。

- 岐阜大学の実施した捕獲技術の分析結果を基に、くくりわなとエサ、障害物を組み合わせた「誘引誘導型捕獲技術」を実践。

県のモデル事業を活用し、猟友会員以外の地域の捕獲者（農業、板金業、測量士等）を指導、育成。

- 食肉等への利活用を前提とした捕獲方法を指導するとともに食肉処理施設を整備し捕獲したシカを食肉として供給する体制を構築。

取組の効果

- 捕獲技術の指導により、猟友会員以外の地域の捕獲者による捕獲が進み、食肉処理施設への搬入頭数が増加。

【処理施設への搬入頭数】

平成25年度→120頭

平成28年度→435頭

- 「ぎふジビエ衛生ガイドライン」に沿って衛生的な処理を徹底し、肉の販路を確保。
- 周辺集落の農業者等に対しても説明会を開催して捕獲を進めるなど、住民合意のもと、地域ぐるみの捕獲体制を確立。

今後の予定・課題

- 町内の農作物被害の軽減に繋がるよう侵入防止柵の設置・維持管理、捕獲等の対策に引き続き取り組む。
- ジビエの認知度や消費拡大のさらなる向上を目指す。
- 捕獲効率を向上させ、ジビエ利用にむける頭数の割合を増加させる。

捕獲者捕獲実績（平成28年度）

狩猟歴	捕獲数(頭)	職業
1年目	130	農業
2年目	53	板金業
3年目	40	農業
2年目	35	測量士
1年目	26	整備士
2年目	17	飲食業



捕獲者への指導



集落への説明会

きっかけ

平成20年頃から、シカやイノシシによる農作物被害の増加を背景に地域住民から対策を求める要望が増加。

◆具体的には、建設業者である所産業(株)の社員が、わな免許(H22)、銃猟免許(H24)を取得。

Step1(H22~H24)

狩猟免許の取得

- 地域住民の要望を背景に、町内で侵入防止柵を設置していた民間企業の社員が狩猟免許を取得。

Step2(H25)

捕獲モデル事業の開始

- 岐阜大学による捕獲技術の分析結果を基に捕獲を実践。
- 県モデル事業を活用して猟友会員以外の地域の捕獲者を指導、育成。

捕獲したシカは生体で搬入し、止め刺し後、1時間以内に枝肉に解体。

◆継続的な取組ジビエ等の利活用の取組開始当初は、批判的な意見を受けることも多かったが、次第に定着。

Step3(H25)

食肉処理施設稼働

- 所産業(株)の子会社の(株)キサラエフアールカンパニーズで食肉処理を開始。

取組に当たっての秘訣

- 地元猟友会で従来あまり重視されていなかったシカを中心に捕獲、利活用することで、取組を定着・拡大。
- 食肉処理施設の作業が無い時は、レストランで提供する食材を栽培する圃場で農作業に従事させることで、労働力の平準化を実現。

将来に向けて

- 町内の農作物被害の軽減に繋がるよう侵入防止柵の設置・維持管理、捕獲等の対策に引き続き取り組む。
- ジビエの認知度や消費拡大のさらなる向上を目指す。
- 捕獲効率を向上させ、ジビエ利用に向ける頭数の割合を増加させる。

総務省事業を活用

Step5(H28)

レストラン等を整備

- レストラン、食肉製品加工所を開設。

Step6(H28~)

ジビエの認知度拡大

- 地元の学校給食への提供。東京などのイベントへの出展など。

取組を経て...

